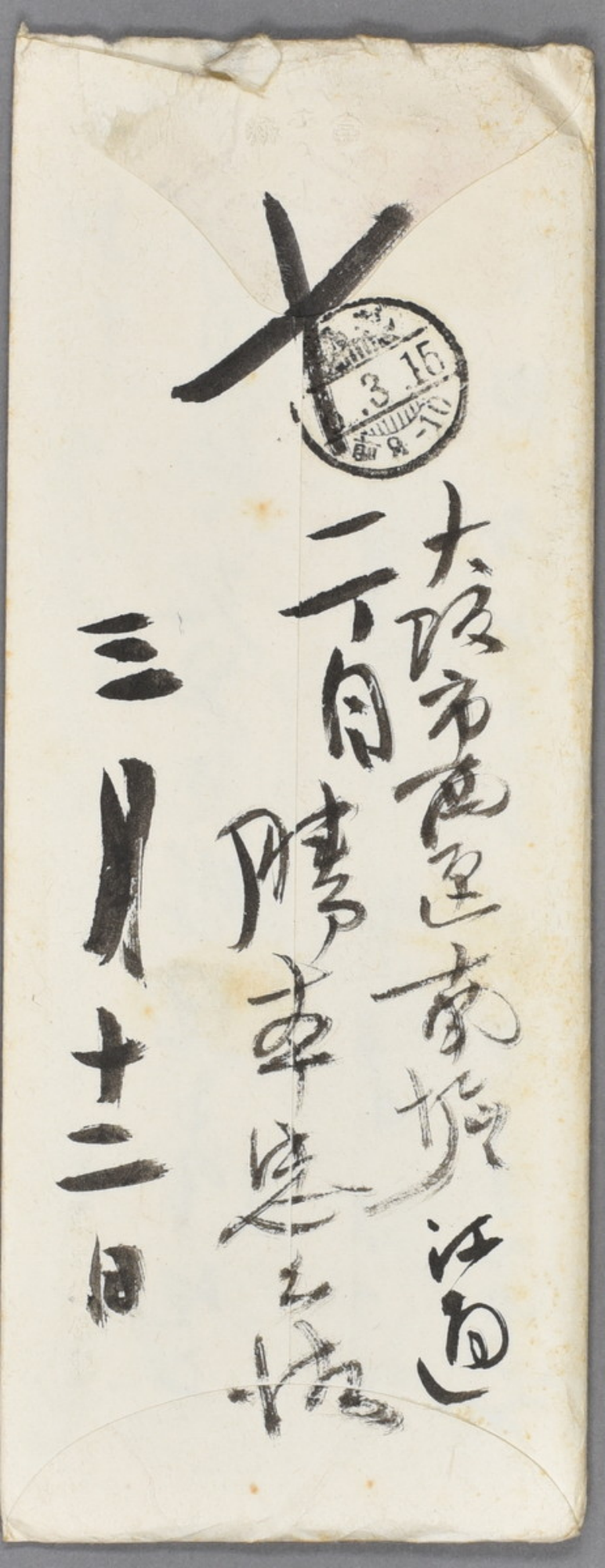
北海道札幌
農学校
八田三郎
様



大阪市西区京橋通
二丁目
陸軍歩兵
三月十二日

拝復 六月八日出御書接多謝

拝見仕候、益御健康奉賀候

小生微恙已ニ快癒不致候

活動ニ従此居り候也乍御安神

ニ由り御休心

前便申上候通ヒ晋苞ニ追リ大ニ

難渋致し候處会社成立も大

よまと確信仕候、本月下旬迄ニ

草地ニて（小生の名義ニて 出来得るヽ確めん）

五六千坪確実と存候其上

東京ニて発起し具体的ニ

発表（本日小生名元ニ而 三千株）

致し大々的活動致す積

本年中葉より小生畢生の事業と

して努力可致決心ニ候、小生ハ

東京方面萬事宜敷願上て

本[illegible]
して勇力の秘決心いたし
東京方面第[illegible]百數[illegible]

○八田氏として相之方と申候大
樓屋に滞在中より謂加之
軍武軍日を明日芦屋に
出発
八田氏夫婦 本人
勝市夫婦 本人
計六人
之に鳥取嬢酌の夫婦
と總計八名
と簡單に致して出発
申候
先兄京阪神に支人相待之
軍武を十二日と定れ大十八日
大阪ホテルにて弱二百數十名
相待所の際に到着を弱ふ
考
芦屋に大五月十二日軍武軍
[illegible]

葬式を十二時
大阪ホテルにて約二百数十名
招待所の際に列席を願ふ

考

芦屋にて五月十二日葬式第
日の西天列席と誤解する際
誤ない

私ども記念写真沙五つ六つ
作ふと調製致度い葬式
第日なほ第四先ども丸淡致
ハ諒案に出ふ所ろ

小生之考案
プログラム左と

五月十二日 葬式

今日午後七時頃
御中宿より鳥取発
妻と令嬢
老兄令夫人本人
指定ハ乗込み
御休息後式の如く三日
九献の盃 休息後
親子親族の盃
石芽生活酒宴と移る

十三日夫御中宿にて御泊

[illegible]
招宴ハ此象迄ヨリ
御休息後式の如く三ヒ
九献の盃 休息後
親子親族の盃
石芽出度酒宴ニ移る

十三日夫御中宿ニて御泊

十四日夫 招宴ニて婦人客
招待其際会主人
御出席

十五日より十七日迄
老兄ニ随ひ大阪ニ赴く

十八日 大阪ホテルニて招宴
デザートコースニ入り
忠兵衛の挨拶
媒酌人の式辞
（此点時日芽出度ニて後
新郎の）
老兄の挨拶
来賓の答辞
取引銀行頭取の
祝辞

鼎一の挨拶

如ち小生の芽出度ニ心し十二日より
十八日迄ニ浦在ル不かと存ず、
[illegible]

雅一の様御

如去小生の考案に候十二日より
十八日迄に浦賀へ参かと存候
此義未だ決定致候
過日の話に軍式の日
但夫れ迄に別紙を以
云々とは物騒なる
何れになりても苦しからず
意にて一応申上候
別紙
御覧の上
相成
樓露会に大山友人何れかも
孫兵衛殿
樓露会と別問題にて
此点藏重にも宜敷
伝ふ
如此之人とは芸術の書物の
意味の配慮の必要なきを
と事なり
天津藩らに

如如さまとは芸人の書翰の
意味を記憶の必要なきを
と事なり
○
天樹院様は西からんと申し
天皇様より東京より国葬
迎送はいかに芸妓敏
一形を奥しゆい保しなれば
苦心の最中へ天寧を乞ふ
老人山妻毎日を(さるからおそる)巣をいつ
合せ式ふしやふ彼しやふと談
合定を賀ふ方有ふも混雑
せるも乃木殿は大驚動を
問はらるならんと女を女史
け大こは同情致し式に思ふ
乃木殿のけ孔迄大混雑
像と仏あり札幌あたりより
元気なるを伸らばせめて
日々の文ことこと心を
度の様と事なれば

微に付あり幡あたらず
元気なるを伸らぬせめて
日々の文にてこれを慰む
接の件とは存ぜざりし
姉夫婦とは如何なる御一件
近頃京乃木阪に不決決
私共にも方々も迷惑
デカタン節でも歌ひたく
接の者とはこれへ
孔子の太申上る山妻
又世を来合せ祝
謂て呉る頂まる事
二月十二日

肝煎

八田光見様